SNSと自己表出との関連性について

1007031
倉松　凌汰

【目的】

本研究の目的は利用頻度(頻度・時間)によって実生活上での自己表出に関する行動と SNS 上での自己表出に関する行動に違いが生じるかどうかを調査することである。SNS 上での自己表出行動と実生活上での自己表出行動の違いを求めるため各場面で 16 項目同じ質問をする。

先行研究でネット上では自己表出を行うということから実生活上では各尺度においては影響を見ることが出来ず,SNS 上での各尺度では影響が見られると推測される。また,利用の高低においても実生活上では影響が見られず,SNS 上では影響が見られるのではないだろうか。また,頻度と自己表出行動の各尺度での結果には差が見られるのではないと考えられる。

【方法】

ウェブ上で作成した調査アンケートの URL を各 SNS(LINE,Twitter,Facebook)にて拡散し,被験者を募った。URL から調査に回答させた被験者数は 201 名(男性 75 名,女性 126 名)であった。質問項目はインターネット行動尺度(藤・吉田, 2009) のうち,自己表出行動の質問項目(16 項目)を使用した。独立変数を SNS(LINE,Twitter,Facebook)の利用頻度(頻度と時間)とし,従属変数は自己表出に関する行動（自己開示,自己演出,自己客観視の計 16 項目）とした。調査時期は 2013 年 11 月 1 日から 11 月 7 日までの 1 週間とした。各 SNS で 2 日に 1 度の頻度で更新をし,拡散の依頼をし続けた。

【結果と考察】

利用頻度と実生活各尺度,利用時間と実生活尺度の結果について多変量分散分析を行ったが,全ての項目においても有意な差が見られなかった。また平均値の差を比較しても大きな差は見られなかった。したがって,SNS の利用頻度,利用時間は実生活自己表出行動において関係性がないと考えられる。その理由として,実生活は実生活でのものであり SNS を意識せずに個々が思うように行動しているため差は出なかったのではないかと推測される。

利用頻度と SNS 各尺度,利用時間と SNS 尺度の結果について多変量分散分析を行った結果,SNS 自己演出は利用頻度,利用時間のどちらにおいても有意な差が見られた。平均値においても大きく差が出ていた。このことからこのことから考えると SNS 上ではなりたい自分を表現しているのではないだろうか。SNS 自己開示の結果を見ると利用頻度,利用時間のどちらにおいても有意な差が見られた。平均値から見てもそれぞれの差が大きく見られた。このことから SNS 上では匿名性が働き,実生活上では表現できない感情や自分の考えを表現していると推測する。また,実生活での対人関係などのストレスを吐き出す場所として SNS が利用されていることも考えられる。SNS 自己客観視は利用頻度においては有意な差が見られたが利用時間においては有意な差はみられなかった。確認のために相関分析を行った結果,多変量分散分析と同じデータを得ることが出来た。

また,利用頻度と利用時間が自己表出に与える影響を検討するために重回帰分析を行った。結果は利用時間が長ければ長いほど SNS 上での自己演出,自己開示をしやすくなるということが得られた。また,利用頻度が多ければ多いほど自己演出,自己客観視をしやすくなる。利用時間と利用頻度は自己演出に影響を与えていることがわかった。共通していることは,SNS の利用は頻度の高低や時間の長短に関わらず影響を与えているということである。

本研究の結果は,実生活においての自己表出は見ることができず,反対に SNS のおいての自己表出は一部を除き顕著なデータが見られた。このことにより,「利用頻度(頻度・時間)と実生活上では各尺度においても有意な差は見ることが出来ず,SNS 上での各尺度では有意な差が見られるのではないだろうか。」という仮説は証明された。重回帰分析の結果によって頻度と自己表出行動の各尺度での結果には差が見られるのではないだろうか。という仮説も一部ではあったが証明された。

（指導教員　豊村　和真　教授）